

〈原 著〉

採点規則の改訂に伴う平行棒の演技構成に 関する一考察

加納 實*・木下紘一郎*・原田 睦巳*

A study on the construction of parallel bar exercises according to
the revision of Code of Points

Minoru KANO*, Koichiro KINOSHITA* and Mutsumi HARADA*

Abstract

The revision of the Code of Points is done every four years and today's Code of Points has contributed to the advancement of the skills and development of the techniques in artistic gymnastics. The revision of 2006 resulted in a big revolution because it abolished the former system which had given ten points for the maximum score.

The purposes of this research were to establish a worldwide standard for the construction of parallel bar exercises based on the changes from the last Olympic Games in Athens to the Olympic Games in Beijing and to investigate the actions to be taken for the future.

We examined the routines of all players who participated in the apparatus finals of parallel bars in the 2004 Olympic Games in Athens and the 2008 Olympic Games in Beijing. After observing these events in detail, we constructed a table of routines.

Results of this research:

The number of skills increased by 6.6 skills per person from the Olympic Games in Athens to the Olympic Games in Beijing. Also, the routine times increased by 13.91 seconds per person. The number of skills in routines was clarified by this research according to the enforcement of the 2006 version of the Code of Points, and the tendency toward increased routine times was clarified.

It is thought that this factor was caused by the spontaneous promotion of an increase in the skills of A difficulty because of the overemphasis on the D and E difficulty skills.

Moreover, it is thought that this places a mental burden on the acquisition of skills by gymnasts and that it also increases the physical demands on their bodies.

Key words: artistic gymnastics, construction of routine, parallel bars, Olympic Games

1. はじめに

FIG(国際体操連盟)の最初の採点規則(Code of Points)は1949年に作成された。各国の審判員による、法外な点数の差や誤った判定を是正するために12ページから成る採点規則であった。しかし、今

日の実質的なルールの基盤となる採点規則は、1964年第18回オリンピック・東京大会の時に作成された¹⁾。その後、4年周期ごとに採点規則の改訂が行われ、体操競技の技の進歩、技術の発展に貢献してきた。その陰には、ルールの改訂により、競技会における戦略や戦術が生まれてきたのも歴史的な事実である。

近年の採点規則の大きな変革は、1997年と2006年

* 体操競技研究室 Seminar of artistic gymnastics

に見ることができる。1997年の改訂²⁾の特徴は、規定演技の廃止と審判の分業制にあった。特に、規定演技は第1回オリンピック・アテネ大会から100年余り継承されてきたが、時代の流れとともに、観客の興味や集客の問題等から、廃止の方向に迫られる結果となった。規定演技の重要性を訴え続けてきた日本側の主張もここでは通らなかった。そして、この規定演技の廃止が競技方法の変革と結びつき、世界の体操競技の流れを大きく変化させることになった。すなわち、これまで規定演技と自由演技の合計得点により、団体総合の順位を決定してきたが、団体予選・決勝と自由演技を2回実施し、予選の得点を持ち越すことなく、団体決勝だけの得点で順位を決定することになった。さらに、団体予選・決勝においては、これまでの各国6人の選手全員が6種目を実施する方式から、各種目5人の選手が実施し、上位4人の合計得点で、団体総合の順位を争う方式になった(6-5-4制)⁶⁾。このことにより、各種目において演技を実施しない選手が出現し、各種目のスペシャリストを誕生させる結果となった。さらに、2001年からは団体決勝において、各種目3人が演技を実施し、3人の合計得点で団体総合の順位を争う方式となり、一人も失敗のできないシビアな競技方式に改革されてきた(6-3-3制)³⁾。このように、世界的な体操競技の流れは各国ともに種目別におけるスペシャリストの育成に拍車が駆けられるようになってきた。

次に2006年の改訂¹⁰⁾では、これまでの10点満点の採点が廃止されるという大きな変革がなされた。採点は演技内容の価値点に関わる〈Aスコア〉と演技構成や技術、姿勢に関する演技の実施点に関わる〈Bスコア〉との合計をもって、選手の得点が決定されるようになり、実質的には10点を大きく超える

点数が出てくることになった。この改訂により、上位選手にとっては高難度技を数多く演技に組み入れることが要求され、体操競技の技は急速に発展せざるを得なくなると同時に、益々種目別のスペシャリストを助長する傾向が強くなってきたといえる。

本研究は、体操競技の演技構成が大きく変化してきている現状を踏まえ、男子6種目の中の「平行棒の演技構成」に着目し、2004年オリンピック・アテネ大会と2008年オリンピック・北京大会を対象とし、採点規則の改訂に伴う平行棒の演技構成の世界的な傾向を探ることを目的とした。

2. 平行棒の演技構成

2.1 平行棒の体系

平行棒の演技構成を考察するにあたり、ここでは平行棒の技の体系について整理しておく必要がある。金子⁵⁾によると平行棒の技の体系は支持系と腕支持系、そして懸垂系の3つに大きく分けることができる。本来、平行棒という器械はあん馬運動の補助器具としてF.L. ヤーンが創作したことから考えれば、支持系は平行棒の構成上、長い歴史の中で発展してきた最も特徴的な技群であるといえる。また、腕支持系は他の器械種目では見ることができない平行棒という器械でしか実施することができない独特な技群である。懸垂系については、時代の流れにより、平行棒運動を大きく変化させた技群であり、特に1978年の世界選手権・ストラスブル大会において日本の監物選手によって発表された後方車輪¹¹⁾の出現により、懸垂系の変化技や発展技が多く開発され、今日の平行棒運動の演技構成を大きく変化させてきたといえる⁷⁾。

2.2 要求グループの設定

2001年版採点規則において、5つの技の要求グループが設定されるようになった。さらに、跳馬を除く各種目の構成は5つの技の要求グループから少なくとも1つのB難度以上の技を含むことが条文化された⁹⁾。平行棒における5つの要求グループは以下の通りである。

I. 両棒での支持振動技

表1 団体総合選手権の競技方法

年 度	団体総合予選	団体総合決勝
1997年～2000年	6-5-4 制	6-5-4 制
2001年～2008年	6-5-4 制	6-3-3 制

- II. 腕支持振動技
- III. 両棒での懸垂振動技
- IV. 力技, 静止技, 旋回技, 横向き単棒技
- V. 終末技

金子の体系を用いてグループ分けすると, グループ I・IV は支持系の技群に属し, グループ II は腕支持系の技群, グループ III は懸垂系の技群に相当するものである。

2004年のアテネ大会はこの2001年版採点規則に準じて行われている。

2006年版採点規則¹⁰⁾では, 以下のように要求グループが見直され, 技のグループとした。特に, 大きな特徴は終末技を除く, 難度の高い9個の技をAスコア(演技の価値点)としてカウントするようになったことである。さらに, 演技が単一グループに偏ることなく構成されるよう, 同一グループからは難度の高い技, 最大4つまでしかカウントできないようになった。

また, 今日の平行棒における演技の主体を占める懸垂系の技群がグループ III (単棒または両棒での長懸垂振動技) とグループ IV (逆懸垂振動技) の2つのグループに分割されるようになった。

- I. 両棒での支持技
- II. 腕支持振動技
- III. 単棒または両棒での長懸垂振動技
- IV. 逆懸垂振動技
- V. 終末技

2008年の北京大会はこの2006年版採点規則に準じて行われている。

2.3 組合せ加点

2001年版採点規則ではD難度以上の技が任意に組合せられた場合, 組合せ加点(0.1~0.2)が与えられるようになっていたが⁹⁾, 組合せ加点の判断基準を瞬時に決定しなければならない審判員にとっては, 技の成立や停止等の問題から, 誤審を引き起こすこともある。アテネ大会で発生した韓国選手に対する審判員の判断ミスは, 全世界のスポーツ界に大きな問題を投げかける結果となった。このような審判業務の繁雑性を減少させる措置から, 2006年版採

点規則では平行棒における組合せ加点は全て廃止され¹⁰⁾, 実施された難度の価値点をAスコアにカウントする合理的なものに改訂された。

3. 研究方法

2006年の採点規則の改訂により, 平行棒の演技構成が世界的にどのような傾向に変化したのかを明らかにするために, 以下のような手順により分析を行った。

第28回オリンピック・アテネ大会(2004)と第29回オリンピック・北京大会(2008)におけるVTRより, 種目別平行棒の決勝に出場した全選手8名の演技を詳細に観察し, 各選手の演技構成表を作成した(表2~3)。

また, 上記の表を原資料とし, 平行棒における演技構成を演技の技数・演技時間・技のグループ別の観点から分析, 比較考察を行った。その際, 考察を容易にするためにアテネ大会の演技も, 本研究では2006年版採点規則の難度, 技のグループに準じて分析・考察を行った。

また, 演技時間については選手が器械に飛びつくために, マットから離足した時点から, 終末技でマットに着地した時点までの時間経過をストップウォッチにて計測した。落下した演技については, 足がマットに着いた時点で計測を停止し, 再び演技を開始する際に計測を再開した。

尚, 演技の技数の平均値の標記については小数第2位を四捨五入した。また, 演技時間の平均値の標記については, 小数第3位を四捨五入し, 有効数字を小数第2位までと設定した。

4. 結果と考察

4.1 演技の技数と演技時間

表4は表2・3の原資料よりアテネ大会及び北京大会における各8名の選手が実施した演技の技数を表にしたものである。この表より, アテネ大会の最少が12技, 最大が16技に対し, 北京大会では最少が16技, 最大が24技となっている。また, 一人あたりの平均技数(8人の技数総数/8人)はアテネ大会が

表2 2004アテネ大会種目別決勝平行棒 演技構成表

氏名	技名	難度	グループ
富田洋之 (JPN)	単棒横向き前方浮腰上がり脚前拳支持経過横向き倒立	C	Ⅲ
	棒下宙返りひねり倒立	E	Ⅳ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(バーレ)	E	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立(チップベルト)	D	Ⅲ
	後方棒上かかえ込み2回宙返り腕支持(モリスエ)	D	Ⅰ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	棒下振り出し腕支持	A	Ⅳ
	後ろ振り上がり倒立	B	Ⅱ
	後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ
難度・グループ・得点	5A1B1C4D2E0F 13技 I ; 3 II ; 3 III ; 3 IV ; 3 Aスコア ; 5.8 Bスコア ; 9.775 得点 ; 15.575		
YERIMBETOV Yernar (KAZ)	け上がり支持	A	Ⅲ
	脚前拳支持(2秒)	A	Ⅰ
	伸腕屈身力倒立(2秒)	B	Ⅰ
	棒下宙返りひねり倒立	E	Ⅳ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	後方車輪片腕支持1回ひねり倒立	D	Ⅲ
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(バーレ)	E	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	棒下振り出し腕支持	A	Ⅳ
	後ろ振り上がり倒立	B	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	前振りひねり倒立	C	Ⅰ
後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ	
難度・グループ・得点	6A2B1C3D2E0F 14技 I ; 5 II ; 2 III ; 3 IV ; 3 Aスコア ; 5.6 Bスコア ; 9.737 得点 ; 15.337		
GONCHAROV Valeri (UKR)	け上がり支持	A	Ⅲ
	脚前拳支持(2秒)	A	Ⅰ
	伸腕屈身力倒立(2秒)	B	Ⅰ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	懸垂前振り後方屈身2回宙返り腕支持	F	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	後ろ振り上がり倒立	B	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	前振りひねり倒立	C	Ⅰ
	後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ
難度・グループ・得点	4A2B1C4D0E1F 12技 I ; 6 II ; 2 III ; 2 IV ; 1 Aスコア ; 5.3 Bスコア ; 9.787 得点 ; 15.087		

表2 2004アテネ大会種目別決勝平行棒 演技構成表(つづき)

氏名	技名	難度	グループ
中野大輔 (JPN)	単棒横向き前方浮腰上がり開脚浮腰支持経過横向き倒立	B	Ⅲ
	懸垂前振り後方屈身2回宙返り腕支持	F	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	逆倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ベール)	E	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立(チップルト)	D	Ⅲ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり腕支持	B	Ⅰ
	後ろ振り上がり開脚入れ支持	B	Ⅱ
	伸腕屈身力倒立(2秒)	B	Ⅰ
	後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり下り	F	Ⅴ
難度・グループ・得点	4A4B0C2D1E2F 13技 Ⅰ; 4 Ⅱ; 3 Ⅲ; 4 Ⅳ; 1 Aスコア; 5.9 Bスコア; 9.762 得点; 15.662		
CUCHERAT Yann (FRA)	単棒横向き前方浮腰上がり脚前拳支持経過横向き倒立	C	Ⅲ
	棒下宙返りひねり倒立	E	Ⅳ
	棒下宙返り背面倒立経過とび倒立	D	Ⅳ
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ベール)	E	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立(チップルト)	D	Ⅲ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり腕支持	B	Ⅰ
	後ろ振り上がり開脚入れ支持	B	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ	
難度・グループ・得点	3A2B1C4D2E0F 12技 Ⅰ; 4 Ⅱ; 2 Ⅲ; 3 Ⅳ; 2 Aスコア; 5.9 Bスコア; 9.762 得点; 15.662		
IVANKOV Ivan (BLR)	前振り上がり開脚抜き倒立	C	Ⅱ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	懸垂前振り後方屈身2回宙返り腕支持	F	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ベール)	E	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	後方棒上かかえ込み2回宙返り腕支持(モリスエ)	D	Ⅰ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	前振り1/4ひねり単棒倒立	D	Ⅰ
	単棒横向き前方浮腰上がり開脚浮腰支持経過横向き倒立	B	Ⅲ
後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ	
難度・グループ・得点	7A1B1C5D1E1F 16技 Ⅰ; 7 Ⅱ; 4 Ⅲ; 3 Ⅳ; 1 Aスコア; 6.2 Bスコア; 9.762 得点; 15.962		

表2 2004アテネ大会種目別決勝平行棒 演技構成表(つづき)

氏名	技名	難度	グループ
LI Xiaopeng (CHN)	単棒横向き前方浮腰上がり脚前拳支持経過横向き倒立	C	Ⅲ
	前振り上がり後方屈身2回宙返り腕支持	F	Ⅱ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	懸垂前振り後方屈身2回宙返り腕支持	F	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	前方開脚5/4宙返り腕支持	D	Ⅰ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	逆倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	前振りひねり倒立	C	Ⅰ
	後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ
難度・グループ・得点	8A0B2C4D0E2F 16技 Ⅰ;7 Ⅱ;4 Ⅲ;3 Ⅳ;1 Aスコア;6.1 Bスコア;9.762 得点;15.862		
HAMM Paul (USA)	棒下宙返りひねり倒立	E	Ⅳ
	棒下宙返りひねり倒立	E	Ⅳ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	前振り上がり後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ドミトリエンコ)	E	Ⅱ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	支持後ろ振り開脚入れ	A	Ⅰ
	伸腕屈身力倒立(2秒)	B	Ⅰ
	後方棒上宙返り倒立	C	Ⅰ
	前振りひねり倒立	C	Ⅰ
	後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ
難度・グループ・得点	2A1B2C2D3E0F 10技 Ⅰ;4 Ⅱ;2 Ⅲ;0 Ⅳ;4 Aスコア;4.8 Bスコア;9.737 得点;14.537		

※カウントされる10個の技だけでなく、個々に難度認定できる技を全て掲載した。

表3 2008年北京大会種目別決勝平行棒 演技構成表

氏名	技名	難度	グループ
PETKOVSEK Mitja (SLO)	前振り上がり開脚抜き倒立	C	II
	棒下宙返り 3/4 ひねり倒立	E	IV
	棒下宙返り倒立	D	IV
	棒下宙返りひねり倒立	E	IV
	懸垂前振り後方かかえ込み 2 回宙返り腕支持 (ペーレ)	E	III
	前振り上がり	A	II
	正倒立ひねり (or 2 秒)	A	I
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立 (チッペルト)	D	III
	後ろ振り片腕支持 1 回ひねり支持 (ヒーリー)	D	I
	後ろ振り倒立 (2 秒)	A	I
	前振り 1/4 ひねり単棒倒立	D	I
	単棒横向き前方浮腰上がり開脚浮腰支持経過横向き倒立	B	III
	前振り上がり	A	II
	前方開脚 5/4 宙返り支持	E	I
	支持前振り開脚抜き倒立	C	I
	後方屈身 2 回宙返り下り	D	V
難度・グループ・得点	4A1B2C5D4E0F 16技 I ; 6 II ; 3 III ; 3 IV ; 3 A スコア ; 6.8 B スコア ; 8.925 得点 ; 15.725		
HUANG Xu (CHN)	棒下宙返り倒立	D	IV
	懸垂前振り後方屈身 2 回宙返り腕支持	F	III
	前振り上がり	A	II
	正倒立ひねり (or 2 秒)	A	I
	前振り上がり後方かかえ込み 2 回宙返り腕支持 (ドミトリエンコ)	E	II
	前振り上がり	A	II
	後ろ振り倒立 (2 秒)	A	I
	懸垂前振り後方かかえ込み 2 回宙返り腕支持 (ペーレ)	E	III
	前振り上がり	A	II
	正倒立ひねり (or 2 秒)	A	I
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立 (チッペルト)	D	III
	後方棒上屈身 2 回宙返り腕支持	E	I
	前振り上がり	A	II
	後ろ振り倒立 (2 秒)	A	I
	後ろ振り片腕支持 1 回ひねり支持 (ヒーリー)	D	I
	正倒立ひねり (or 2 秒)	A	I
	前振り上がり	A	II
	前方開脚 5/4 宙返り腕支持	D	I
	前振り上がり	A	II
	正倒立ひねり (or 2 秒)	A	I
	後方棒上かかえ込み 2 回宙返り腕支持 (モリスエ)	D	I
	前振り上がり	A	II
	後ろ振り倒立 (2 秒)	A	I
後方屈身 2 回宙返り下り	D	V	
難度・グループ・得点	14A0B0C6D3E1F 24技 I ; 11 II ; 8 III ; 3 IV ; 1 A スコア ; 7.0 B スコア ; 8.7 得点 ; 15.700		

表3 2008年北京大会種目別決勝平行棒 演技構成表(つづき)

氏名	技名	難度	グループ
HAMBUECHEN Fabian (GER)	棒下宙返りひねり倒立	E	Ⅳ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	後方背面車輪倒立(ひねり倒立)(ウエルス)	D	Ⅲ
	前振り上がり後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ドミトリエンコ)	E	Ⅱ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	逆倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ベーレ)	E	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	後方棒上屈身2回宙返り腕支持	E	Ⅰ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立(チッペルト)	D	Ⅲ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	逆倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	後方棒上かかえ込み2回宙返り腕支持(モリスエ)	D	Ⅰ
	前振り上がり	A	Ⅱ
後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ	
後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ	
難度・グループ・得点	9A0B0C6D4E0F 19技 I ; 8 II ; 5 III ; 3 IV ; 2 Aスコア ; 6.9 Bスコア ; 9.075 得点 ; 15.975		
FOKIN Anton (UZB)	前振り上がり開脚抜き倒立	C	Ⅱ
	棒下宙返りひねり倒立	E	Ⅳ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	懸垂前振り後方屈身2回宙返り腕支持	F	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	逆倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ベーレ)	E	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立(チッペルト)	D	Ⅲ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	後方棒上かかえ込み2回宙返り腕支持(モリスエ)	D	Ⅰ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	Ⅰ
	支持前振り開脚抜き倒立	C	Ⅰ
前振り上がり	A	Ⅱ	
前方かかえ込み2回宙返り下り	E	Ⅴ	
難度・グループ・得点	9A0B2C4D3E1F 19技 I ; 8 II ; 5 III ; 3 IV ; 2 Aスコア ; 6.8 Bスコア ; 9.400 得点 ; 16.200		

表3 2008年北京大会種目別決勝平行棒 演技構成表(つづき)

氏名	技名	難度	グループ
KRYUKOV Nikolay (RUS)	前振り上がり開脚抜き倒立	C	II
	棒下宙返り倒立	D	IV
	棒下宙返りひねり倒立	E	IV
	後方車輪片腕支持1回ひねり倒立	D	III
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ペーレ)	E	III
	前振り上がり	A	II
	後ろ振り倒立(2秒)	A	I
	前振り片腕支持5/4ひねり単棒倒立直ちに1/4ひねり両棒倒立	D	I
	前振り1/4ひねり単棒倒立	D	I
	前振り上がり	A	II
	後ろ振り倒立(2秒)	A	I
	後方棒上かかえ込み2回宙返り腕支持(モリスエ)	D	I
	前振り上がり	A	II
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	I
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	I
	前振り上がり	A	II
	前方かかえ込み2回宙返り下り	E	V
難度・グループ・得点	7A0B1C6D3E0F 17技 I ; 7 II ; 5 III ; 2 IV ; 2 A スコア ; 6.7 B スコア ; 8.450 得点 ; 15.150		
YOO Wonchul (KOR)	棒下宙返り倒立	D	IV
	懸垂前振り後方屈身2回宙返り腕支持	F	III
	前振り上がり	A	II
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	I
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ペーレ)	E	III
	前振り上がり	A	II
	逆倒立ひねり(or 2秒)	A	I
	後方棒上屈身2回宙返り腕支持	E	I
	前振り上がり	A	II
	後ろ振り倒立(2秒)	A	I
	前振り上がり後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ドミトリエンコ)	E	II
	前振り上がり	A	II
	後ろ振り倒立(2秒)	A	I
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	I
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立(チッペルト)	D	III
	後方棒上かかえ込み2回宙返り腕支持(モリスエ)	D	I
	前振り上がり	A	II
	後ろ振り倒立(2秒)	A	I
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	I
	正倒立ひねり(or 2秒)	A	I
	後方棒上宙返り1/4ひねり単棒横向き倒立(ピーターズ)	D	I
	単棒横向き前方浮腰上がり開脚浮腰支持経過横向き倒立	B	III
後方屈身2回宙返り下り	D	V	
難度・グループ・得点	12A1B0C6D3E1F 23技 I ; 11 II ; 6 III ; 4 IV ; 1 A スコア ; 7.0 B スコア ; 9.250 得点 ; 16.250		

表3 2008年北京大会種目別決勝平行棒 演技構成表(つづき)

氏名	技名	難度	グループ
YANG Taeyoung (KOR)	棒下宙返りひねり倒立	E	Ⅳ
	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	懸垂前振り後方屈身2回宙返り腕支持	F	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	逆倒立ひねり (or 2秒)	A	Ⅰ
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(バーレ)	E	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	前振り上がり後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ドミトリエンコ)	E	Ⅱ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	前方開脚5/4宙返り腕支持	D	Ⅰ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり (or 2秒)	A	Ⅰ
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立(チッペルト)	D	Ⅲ
	後方棒上かかえ込み2回宙返り腕支持(モリスエ)	D	Ⅰ
	前振り上がり	A	Ⅱ
後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ	
後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ	
難度・グループ・得点	11A0B0C7D3E1F 22技 Ⅰ;10 Ⅱ;6 Ⅲ;3 Ⅳ;2 Aスコア;7.0 Bスコア;8.650 得点;15.650		
LI Xiaopeng (CHN)	棒下宙返り倒立	D	Ⅳ
	棒下宙返り3/4ひねり倒立	E	Ⅳ
	倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立(チッペルト)	D	Ⅲ
	正倒立ひねり (or 2秒)	A	Ⅰ
	後方車輪倒立(ケンモツ)	C	Ⅲ
	懸垂前振り後方屈身2回宙返り腕支持	F	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ
	後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	D	Ⅰ
	正倒立ひねり (or 2秒)	A	Ⅰ
	前振り上がり後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ドミトリエンコ)	E	Ⅱ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	正倒立ひねり (or 2秒)	A	Ⅰ
	懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(バーレ)	E	Ⅲ
	前振り上がり	A	Ⅱ
	前方開脚5/4宙返り腕支持	D	Ⅰ
	前振り上がり	A	Ⅱ
後ろ振り倒立(2秒)	A	Ⅰ	
後方屈身2回宙返り下り	D	Ⅴ	
難度・グループ・得点	9A0B1C5D3E1F 19技 Ⅰ;7 Ⅱ;5 Ⅲ;4 Ⅳ;2 Aスコア;6.9 Bスコア;9.550 得点;16.450		

※カウントされる10個の技だけでなく、個々に難度認定できる技を全て掲載した。

表4 アテネ・北京大会における種目別平行棒出場者の演技技数

アテネオリンピック (2004年)			北京オリンピック (2008年)		
選手名	国	技数	選手名	国	技数
富田洋之	JPN	13	PETKOVSEK Mitja	SLO	16
YERIMBETOV Yernar	KAZ	14	HUANG Xu	CHN	24
GONCHAROV Valeri	UKR	12	HAMBUECHEN Fabian	GER	19
中野大輔	JPN	13	FOKIN Anton	UZB	19
CUCHERAT Yann	FRA	12	KRYUKOV Nikolay	RUS	17
IVANKOV Ivan	BLR	16	YOO Wonchul	KOR	23
LI Xiaopeng	CHN	16	YANG Taeyoung	KOR	22
HAMM Paul	USA	10	LI Xiaopeng	CHN	19
技数平均値 (技数総数/8)		13.3	技数平均値 (技数総数/8)		19.9

※北京大会の YANG Taeyoung 選手はヒーリー後、ダブルスイングをし、再度ヒーリーを実施 (繰り返したがカウントをした)。

表5 アテネ・北京大会における種目別平行棒出場者の演技時間

アテネオリンピック (2004年)			北京オリンピック (2008年)		
選手名	国	演技時間	選手名	国	演技時間
富田洋之	JPN	41.34	PETKOVSEK Mitja	SLO	43.40
YERIMBETOV Yernar	KAZ	30.46	HUANG Xu	CHN	53.78
GONCHAROV Valeri	UKR	28.28	HAMBUECHEN Fabian	GER	45.50
中野大輔	JPN	36.93	FOKIN Anton	UZB	48.81
CUCHERAT Yann	FRA	31.65	KRYUKOV Nikolay	RUS	44.87
IVANKOV Ivan	BLR	38.28	YOO Wonchul	KOR	55.78
LI Xiaopeng	CHN	37.06	YANG Taeyoung	KOR	51.28
HAMM Paul	USA	25.62	LI Xiaopeng	CHN	37.43
平均演技時間		33.70	平均演技時間		47.61

13.3技に対し、北京大会は19.9技と大幅に増加していることが分かる。すなわち、アテネ大会から北京大会においては一人あたり6.6技増えてきていることになる。

表5はVTRより演技時間を計測したものである。アテネ大会の最少が25.62秒、最大が41.34秒に対し、北京大会では最少が37.43秒、最大が55.78秒となっている。また、アテネ大会は8人の平均時間(8人の演技時間の総計/8人)が33.70秒であったも

のが、北京大会では47.61秒と一人あたり13.91秒増加している結果となった。

このように、2006年版採点規則の改訂により、選手はAスコア(演技の価値点)を高める方策として、演技の技数、演技時間の増大を余儀なくされているといえる。このことは選手にとって、技の習得に費やす時間や努力だけではなく、怪我や故障といった身体的な負荷も大きくなってきていることが推察される。また、アテネ大会では8人の選手が失敗

なしに演技しているのに対し、北京大会では8人中2人の選手が落下、あるいは失敗をし、本来の演技を実施できなかったことから伺うことができる。

渡邊¹²⁾は10点満点が撤廃されたことにより、選手は確認済みの難度記号のついている技しか練習しなくなり、高得点を求める直進的な発展傾向の特性を述べている。すなわち、際限なく演技価値点の増大を目指す方向性は、今後も続いていくことが推察される。そのことは演技の成功と失敗が表裏一体の様相を示すことになり、体操競技の本質を揺るがす危険性を含んでいることになる。

さらに、両大会ともに種目別決勝へ出場した8人の選手の内、4人が6種目を行うオールラウンダーであり、他の4人が6種目を実施しない、いわゆるスペシャリスト的存在の選手であった。この傾向は次のオリンピック・ロンドン大会へも継承されていくことが予測され、スペシャリストの台頭が益々助長される時代を推測させるものである。

4.2 技のグループ別演技構成の比較

表6は表2・3の原資料よりアテネ大会及び北京大会における各8名の選手が実施した全ての技をグループ別、難度別に表にしたものである。また、図1はグループ別に実施された技の総数をグラフにしたものである。これらより、実施された技の総数はグループI(両棒での支持系)が最も多く、次いでグループII, III, IVの順に実施されていることが分かる。この順番は両大会ともに同様の傾向にあった。

すなわち、これまでの平行棒運動の歴史的な流れの中で⁵⁾、技の豊富さからも、支持系の技群が圧倒的な地位を占めているといえる。また、グループIII・IVは2001年版⁹⁾では懸垂振動技(グループIII)として一つのグループを形成していたものが、2006年版¹⁰⁾の改訂により、二つに分割されたものであり、技の総数も自動的に分散される傾向になったと考えられる。

4.2.1 グループI(両棒での支持技)

グループIではA難度の後ろ振り倒立(2秒静止)がアテネ大会の4技から、北京大会では18技と圧倒的に多く増加している。一人の選手が単純に、2回以上実施していることになる。もちろん、終末技を除く9技の演技構成の中にカウントされることのない技ではあるが、宙返りを伴う高難度技を実施した後に使用されることにより、おのずと増加傾向を辿ることになる。同様に、正倒立ひねりも17技と増加している。一方、B・C難度技の実施はアテネ大会では実施されていたものの、北京大会におけるB難度技の実施は皆無であり、C難度も支持前振り開脚抜き倒立の2技だけであった。この技は2001年版ではB難度であったが、2006年版にC難度に格上げされたことから使用されるようになったと考えられる。さらに、アテネ大会のD難度技は全体で9技であったものが、北京大会では22技に増加している。中でも後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒリー)が9技、後方かかえ込み2回宙返り腕支持

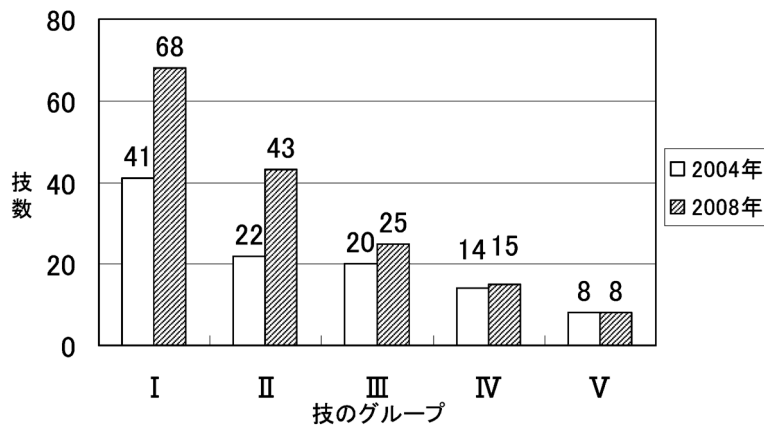


図1 グループ別 技の実施総数

表6 2004・2008オリンピック 種目別決勝平行棒 グループ・難度別実施比較

技名	難度	技数		難度別総数		グループ別技総数		一人あたりの平均技数 (グループ別総数/36人)		一人あたりの平均技数 (技数総数/8人)						
		2004年	2008年	2004年	2008年	2004年	2008年	2004年	2008年	2004年	2008年					
脚前拳支持(2秒)	A	2	0	21	40											
支持後ろ振り開脚入れ		1	0													
後ろ振り倒立(2秒)		4	18													
正倒立ひねり(or 2秒)		12	17													
逆倒立ひねり(or 2秒)		2	5													
支持前振り開脚抜き支持	B	0	0	6	0											
後ろ振りとびひねり倒立		0	0													
後ろ振り片腕支持1回ひねり腕支持		2	0													
屈腕伸身力倒立(2秒)・伸腕屈身力倒立(2秒)		4	0													
前振り片腕支持3/4ひねり単棒倒立直ちに片腕支持3/4ひねり支持(マクーツ)(ひねり戻り)	C	0	0	5	2	41	68	5.1	8.5							
後方棒上宙返り倒立		1	0													
後ろ振りとび3/4ひねり倒立		0	0													
前振り片腕支持(1回or 5/4)ひねり倒立(ディアミドフ)		0	0													
支持前振り開脚抜き倒立		0	2													
前振りひねり倒立	4	0	D	9	22											
前振り片腕支持5/4ひねり単棒倒立直ちに1/4ひねり両棒倒立	0	1														
後ろ振り片腕支持1回ひねり支持(ヒーリー)	5	9														
前方開脚5/4宙返り腕支持	1	3														
後方棒上かかえ込み2回宙返り腕支持(モリスエ)	2	6														
前振り1/4ひねり単棒倒立	1	2														
後方棒上宙返り1/4ひねり単棒横向き倒立(ピーターズ)	0	1														
前方開脚5/4宙返り支持	0	1	E	0	4											
後方棒上屈身2回宙返り腕支持	0	3														
後ろ振り上がり開脚入れ屈腕支持	A	0	0	14	35					13.3	19.9					
前振り上がり		14	35													
後ろ振り上がり倒立	B	3	0	5	0											
後ろ振り上がり開脚入れ支持		2	0													
後ろ振り上がりとびひねり倒立	C	0	0	1	3	22	43	2.8	5.4							
前振り上がり開脚抜き倒立		1	3													
後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持	D	0	0	0	0											
前振り上がり後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ドミトリエンコ)	E	1	5	1	5											
前振り上がり後方屈身2回宙返り腕支持	F	1	0	1	0											
け上がり支持	A	2	0	2	0	20	25	2.5	3.1							
単棒横向き前方浮腰上がり開脚浮腰支持経過横向き倒立	B	2	2	2	2											
け上がり開脚抜き倒立	C	0	0	3	1											
単棒横向き前方浮腰上がり脚前拳支持経過横向き倒立		3	0													
後方車輪倒立(ケンモツ)	0	1	D	4	9											
倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり(かかえ込みor 屈身or 開脚)前方宙返り腕支持	0	0														
後方背面車輪倒立(ひねり倒立)(ウエルズ)	0	1														
懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持	0	0														
後方車輪片腕支持1回ひねり倒立	1	1														
倒立から伸膝で振り下ろし懸垂前振り上がり開脚抜き倒立(チップベルト)	3	7	E	5	8											
懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ペーレ)	5	8														
懸垂前振り後方屈身2回宙返り腕支持	F	4	5	4	5	14	15	1.8	1.9							
棒下振り出し腕支持	A	2	0	2	0											
棒下宙返り倒立	D	7	8	7	8											
棒下宙返り3/4ひねり倒立	E	0	2	5	7											
棒下宙返りひねり倒立		5	5													
後方かかえ込み2回宙返り下り	C	0	0	0	0	8	8	1.0	1.0							
後方屈身2回宙返り下り	D	7	6	7	6											
前方かかえ込み2回宙返り下り	E	0	2	0	2											
後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり下り	F	1	0	1	0											

(モリスエ)が6技であった。E難度については、アテネ大会では皆無であったが、北京大会においては後方屈身2回宙返り腕支持(屈身モリスエ)が3名の選手によって実施されている。

上記より、グループIにおいてはD・E難度技の増加を見てとることができる。中でもモリスエ系、ヒリーという技に傾斜していることが分かる。また、B・C難度技の実施が極端に少なくなっているのも大きな特徴といえる。一方、A難度技である後ろ振り倒立や正倒立ひねりの増加は他のグループも含め、D・E難度技の実施の増加により、腕支持の体勢で受け、前振り上りを実施し、後ろ振り倒立あるいは正倒立ひねりにつなげるために、自然発生的に増加傾向を示すようになってきたと考えられる。

4.2.2 グループII(腕支持振動技)

このグループでのD難度技の実施は両大会とも皆無であった。選手はC・E難度で要求を満たす努力をしていることが伺える。E難度の前振り上り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(ドミトリエンコ)はアテネ大会に1名だけの実施であったものが、高難度技への傾斜から北京大会では5名が実施するようになった。他の3名はC難度の前振り上り開脚抜き倒立を実施しており、このグループは上記2つの技に加え、A難度の前振りあがりの3技しか実施されていないことが大きな特徴といえる。また、A難度である前振り上りがアテネ大会の14技から、北京大会では35技と圧倒的に増加しており、最も多く実施されている技であった。これはグループIと同様に、高難度技への実施傾向により、Aスコアにカウントされることはないものの、自然発生的に増加傾向を示すようになってきたものであり、採点規則の改訂に伴う演技構成の大きな特徴となってきたことが明らかであるといえる。

4.2.3 グループIII(単棒または両棒での長懸垂振動技)

このグループの特徴はA～C難度技までは大きな変化は見られず、実施も少ない。特に、グループI・IIにおけるA難度技は北京大会において、大きな増加傾向が見られたが、グループIIIのA難度

の実施は皆無であった。しかし、E難度の懸垂前振り後方かかえ込み2回宙返り腕支持(バーレ)が北京大会では8技と決勝に出場した全員が行っており、いわゆる必須技の様相を示しているといえる。また、D難度の懸垂前振り上り開脚抜き倒立(チップルト)が7人、F難度の屈身バーレが5人と、高難度の技である3技に集中していることがこのグループの特徴である。

4.2.4 グループIV(逆懸垂振動技)

グループIIIとIVは2001年版において、両棒での懸垂振動技(グループIII)として一つのグループであったものが、2006年版において同一グループから4技までというルール上の制限(縛り)から、2つに分割された。そのため、A難度である棒下振り出し支持がアテネ大会で2技行われただけで、B・C難度技の実施は皆無であった。北京大会ではA～C難度技の実施は皆無であり、当然、グループ総数も一番少ない結果となった。しかし、D難度以上の技は今日の平行棒運動の演技構成にとって必須技が多く、このグループはD・E難度技に集中していることが分かる。D難度技の棒下宙返り倒立はアテネ大会では7人が実施し、北京大会では8人全員が実施している。すなわち、平行棒の演技構成にとって必要不可欠な技となってきている。また、棒下宙返りひねり倒立(E難度)は両大会ともに5人が行い、棒下宙返り3/4ひねり倒立(E難度)は北京大会において2名が実施している。この棒下宙返りは1928年のオリンピック・パリ大会に採用されてから、これまでも多くの規定演技の中に組み込まれてきた技の一つである。近年の技術的な進歩により、伸腕での棒下宙返り倒立を実現させ、さらには棒下宙返りひねり倒立、棒下宙返り3/4ひねり倒立を可能としてきた⁴⁾。

グループIII・IVの懸垂系の技群はA難度～C難度の技の実施はほとんどなく、D難度の棒下宙返り倒立を基本とし、その発展技である高難度技に集中していることが明らかである。

4.2.5 グループV(終末技)

終末技は他のグループと違い、一つの技が選択さ

れることになる。さらに、2006年版ではD難度技が要求されており、後方屈身2回宙返り下りに集中する傾向にあり、モノトニー(単調性)現象を起こしているのは事実である。しかし、金子⁶⁾はモノトニー現象の問題性の中で、観衆の立場と選手の立場からの問題を指摘し、選手の憧憬を無視することは体操競技の発展にも影響するものであり、皮相的な対策では解決できないとしている。幸い、北京大会においてはE難度の前方かかえ込み2回宙返り下りが2名によって実施されており、モノトニーの打開策となる可能性を秘めている。また、採点規則の改訂と共に、高難度技への傾斜傾向からも、今後多くの選手によって実施されることが予測される。

5. ま と め

体操競技の採点はこれまで10点満点で実施されてきたが、2006年に改訂された採点規則の施行により、10点満点が廃止されるという体操競技界にとって、大きな変革をもたらした。本研究は10点満点で競技された最後のオリンピック・アテネ大会と10点満点の廃止後最初に行われたオリンピック・北京大会との平行棒の演技構成の比較考察を行い、平行棒の演技構成における世界的な傾向を探ることを目的とした。

その結果、選手は高得点を得るためにAスコア(演技の価値点)の上昇を目的として、各グループ内における特定の高難度技への集中的な実施傾向が顕著に見られた。また、そのことは自然発生的にグループI・IIのA難度技の増加傾向を誘引し、演技の技数の増加と演技時間の増加を引き起こす結果となってきたことは明らかである。このことは選手にとって、技の習得に費やす時間や努力だけで

はなく、怪我や故障といった身体的な負荷も大きくなっていくことが推察される。

文 献

- 1) FIG (1975) *Code of Points 1975 Edition*. Men's Technical Committee of FIG, 4-5.
- 2) FIG (1997) *Code of Points 1997 Edition*. Men's Technical Committee of FIG, 4-13.
- 3) FIG (2001) *Technical Regulations 2001 Section2*. Technical Committee of FIG, 6-10.
- 4) 鹿島丈博・原田睦巳・伊藤政男(2007)平行棒における「棒下宙返り倒立」の技術に関するモルフォロジーの一考察. *体操競技・器械運動研究*15号, 31-41.
- 5) 金子明友(1974) *体操競技のコーチング*. 第1版, 東京, 大修館書店, 99. 361-374.
- 6) 金子明友(1972)モノトニー現象の問題性. *研究部報* 29号, 1-6.
- 7) 加納 実・伊藤政男(1993)平行棒における「振り下ろし懸垂前振り」の技術に関する研究. *順天堂大学保健体育紀要*35号, 4-7.
- 8) 日本体操協会(1997) *FIG 競技規則1997年版*. 財団法人日本体操協会, 9.
- 9) 日本体操協会(2001) *採点規則 男子 2001年版*. 体操競技委員会 男子審判部, 東京, 財団法人日本体操協会, 12. 85-86.
- 10) 日本体操協会(2006) *採点規則 男子 2006年版*. 審判委員会体操競技男子部, 東京, 財団法人日本体操協会, 15-27.
- 11) 竹内芳勝(1979)第19回世界選手権報告. *研究部報*45号, 1-7.
- 12) 渡邊 伸(2005)体操競技の様式変遷に関する一考察. *体操競技・器械運動研究*13号, 1-9.

(平成20年11月7日 受付)
(平成21年2月6日 受理)